防犯最前線

第6話 折戸区自主防犯クラブ

防犯活動は健康づくり 総合力で子どもと地域の安全守る

住宅地をパトロールするメンバーら＝藤塚で

「おーい、後ろが付いてきとらんのでゆっくり歩こう」

11月の秋晴れの朝、そろいの黄緑の帽子とベスト姿のメンバー15人が、藤塚7丁目にある畑の休憩所を出発した。狭い道路では車は徐行し、ドライバーは自然と会釈する。出会った人たちに声を掛ける。道に横たわるペットのネコにまで。まさに、土着しているメンバーだからこそできるパトロールだ。

メンバーの大半は、いきいきクラブの加入者。そのほとんどは70代、80代。杖を持って坂道を元気に歩く人もいる。「歩くのは健康の一つ。みんなで動いとるので長生きできるんです」と笠井治さん（73）は笑って話す。

折戸区はとにかく広い。折戸町、栄、藤塚のほか、東山の一部もまたぎ、約5800世帯が住む市内最大の地区だ。そのため、およそ50人のメンバーが東西南北の4つに分かれて、南小・梨の木小の児童の見守り▽地区内の巡回▽青色パトロールを、月1、2回のペースで続けている。

クラブの設立は5年前。区にはもともと自主防災会はあったが、市内で空き巣や車上荒らし、高齢者をねらった詐欺が増え、地元いきいきクラブの協力で立ち上げた。

当時から会長を務める中川道雄さん（71）は「うちは防犯と健康が目的。それぞれの組長さんが仕切って、皆さんが気楽に動いてくれる」と語る。笠井さんの兄・泰司さん（75）は設立当時、メンバーの募集役を買って出た。「折戸の年寄りはまとまりがある。一年中入会の門は開けています（笑）」と気さくに話す。

昨年から両校PTAの保護者と、夏の盆踊り大会の当日、夕暮れの合同パトロールを始めた。メンバーは「親世代の皆さんは折戸の周辺を歩いて回ることはない。地域を知っていただき交流も深まった」と確かな感触をつかんだ。

毎朝交差点に立って、子どもたちの安全を見守る人もいる。中川さんは「いろんな立場の人の熱心な活動のおかげで、子どもたちはちゃんと答えてくれる。将来区の役員が交代で自動的に加入すれば、いい流れができるのでは。安全で安心できるまちでいたい」と願う。（広）

年末年始「泥棒に気をつけて」

県警OBの橋本栄一さん（61）と中屋秀明さん（58）は、市の嘱託員として市営交番ひまわりを拠点に、防犯に携わる。青パトを一日平均約40㌔走行。小学校の下校時や犯罪発生地区の夕暮れや夜間、不審者に目を光らせる。

中屋さんは新興住宅街を防犯診断したとき、いつも言う。「泥棒は若い世代が住む街をねらうのは地域のコミュニケーションがないから。日頃からだれとでも会話ができるつながりを作って」と。橋本さんは高齢者をねらった悪質な訪問販売対策について、「インターホンのあるなしにかかわらず、ドアを開けたら終わりだと思って断ること」が基本。年末年始は「余分なお金や物を持たない。後ろから来るひったくりに気をつけて」と呼び掛けている。

パトロールに出発する橋本さん（左）と中屋さん